

## へ鉢木へのワキ

山中玲子

「へ鉢木」においては、零落してもなお武士の気概を失わないシテ常世とともに、そういう常世を見出しきちんと報いるワキ時頼の公正さや身分を越えた二人の心の交流なども、人々を引きつける魅力となっている。

脇方の伝書からは、時頼の人物像をどう描き出すか、様々な工夫がされてきた様子があるが、以下ではその中から替演出を二種紹介し、それぞれの演出意図や効果を考えてみたい。

### 【二階堂、文懐中ノ事】

本曲後場に登場するワキツレ（観世・金剛・喜多の謡本では「二階堂」の名を与える）は太刀持の役を務め、後場の冒頭でワキの命令を受けてアイを呼び出し常世を捜し出すよう手配するのが仕事だが、脇方進藤流には、二階堂という名のワキツレが、通常よりも多く活躍する替演出が存在する。加賀の進藤流脇役者、金堂久左衛門の記した伝書『直伝脇仕形并ニ装束付』（鴻山文庫

蔵）は次のような替演出を伝えている（適宜漢字や句読点を付し、仮名遣いを改めなどの手を加えて掲げる。以下同）。

一、「おいかけたり」ト、此所ニテ、ワキヨリツレへ謡無之。ワキ、一向に構ワズニ居ル（A）。

一、二階堂、笛ノ上座ニ居テ「おいかけたり」ト立テ、一足出ナガラ、セリフ「いかに誰か有る」ト狂言呼び出シ、「国々の諸軍勢ハ皆々来りてあるか」「シカシカ」

「その諸軍勢の中にいかにも……」ト台詞ニテ、二階堂ヨリ直ニ申渡シアトへ引、又、下ニ居ル（B）。

但シ御好ミニ付、台詞「もし咎むる者あらバ二階堂が」トいふ所、抜ケル也（C）。

一、ワキ語り「梅松松にて」トいふ時ニ扇子開キ、文ヲ取出シ、上ニ載セ、両手ニ持テ立テ脇ノ際へ行き、中腰ニ下ニ居ナガラ、扇子下ニ置キ文ヲ取り、両手ニテワキノ左ノ手ニ渡ス。「三ヶの庄」トいふ辺ニテ渡スベシ。ワキ横柄ニ左ノ手ニ

トル。もつとも文ニ目ハ付ケズ。「自筆の状」ト文ヲ見ル也（D）。

右の替演出では、後場の初めで常世を捜し出せと命ずる場面がワキとワキツレの間答ではなくワキツレとアイの間答になる（B）。軍勢の招集が時頼の意向であることに間違いないだろうが、右の場合はそうしたワキの意志は極力見えないようになっている（A）。

「もし咎むる者あらバ、二階堂が」（C）は、アイの従者が諸国の軍勢の中を探し回る行為を誰かにとがめられたなら、二階堂の命令だと言えというような台詞と想像される。貴人の好みで省くことも可能というが、基本的にはこの替演出の時に入っていたということ、それは二階堂の権威をはっきりさせる工夫だろう。ワキツレの二階堂程度で、十分偉いのである。

御教書はワキが懐中するのではなく二階堂が持つて出てワキに渡す（D）。本来、二階堂の名は鎌倉幕府の有力御家人としてよく知られていたために用いられたにすぎなかったのだろうが、その二階堂氏が鎌倉幕府の行政事務を担当していたという知識がDのような演出（これだけなら他流にもある）を産み、さらに、最明寺時頼ほどの高位の人物が直接常世と応対するのを不自然とする感覚と結びついてA〜Cが付け加

わっていったのだろうか。

二階堂から文書を受け取るワキの型を傍線部で「横柄」と指示するのも面白い。右の引用箇所とは別にワキの型について

「『梅桜松にしてありしよな』ト顔ヨリ先ニ横柄ニシテヲ見込ナガラ」という記述もあり、時頼を「偉そうに」描くことがこの演出の狙いの一つだったと思われる。常世に御教書を渡す際も、手渡すのではなく、「文を前へ投げ出す」型が演じられていた。

こうした演出が工夫される一方、高安流の脇伝書『鶯永花伝集』（鴻山文庫蔵）は脇、大夫畏ルト「やあいかにあれ成は」ト見ル。：「先々沙汰の物」ト大夫へ向。「三十四郷」ト文取出シ、投ゲ遣リモスル。：「いで其時の」ト大夫へ向。「相違あらざる」ト文取出シ爰ニテ渡シモスル。コノ方ヨキ也。

と、ワキが何度もシテに顔を向け直接話しかけるような型（傍線部）を記し、また書状は投げ与えるより手渡す型の方を良しとしている。こちらは進藤流とは逆に、時頼の位の高さより常世との心の交流を強く出す演出として理解できよう。時頼の身分の高さも重要な要素に違いないが、本来はそうした身分の差を越えた常世と時頼との心の通い合いこそが本曲のポイントのはずである。その意味では高安流の演出の方が自

然なわけだが、そこを崩してまで時頼の格を強調する進藤流の替演出は、いかにも江戸時代的な感覚の演出と言えようか。

#### 【雪持之伝】

寛政頃の内容を持つ『福王流脇所作秘伝書』（鴻山文庫蔵）は「副王老人」（天明5年に85歳で没した茂右衛門盛勝か）の演じた「老年ノ形」を次のように記す。

始メ杖突キ出ル。名ノリモ笠ヌガズ。橋掛へ行モ、杖ツキテ「一夜ハ泊リ」ト両手ニテ杖ツキ、少々辞儀ノ心持ナリ。曲止メ「ヨクアタリ」ニ安座ニ居、手ヲ前ニヤリ、クツロギアタル心、少々辞儀ノ心持アリ。其マ、ニテ問答。「ナウソレハ」ト膝直ス。装束、花ノ帽子・白綾・指貫・長絹・少サ刀・金扇。語ノ中、「イツノ世ニカハ」ト両手ヲ寄せ、少々向ヘカ、リ、礼スル心持ノ形。安堵ノ状、一ノツレニ渡シ。又一ノツレ懐中シ、出合テテケノ庄ト取出シ、左手持チ、辞儀シテワキヘ渡ス。：

老人らしく杖を突いて出、常の演出（次第返シニテ笠脱ギ）よりずっと長く笠を着続け、名ノリの時にする達拝の型もない。ゆつたりと座して火にあたり、全体にくつろいだ雰囲気である。後場でシテに書状を与える時も、通常の型は

：懐中ヨリ取出シ見出シ、左ニ持チ「安

堵ニ」トシテへ投出す

というものだが、右ではワキツレ（一ノツレ）に渡す型になっている（ワキツレが書状を懐中する型も併記されるが、先のA・Cに当たる役割は果たしていない）。またその前の「語り」の中も「横柄」とはほど遠く、常世の親切に「両手ヲ寄せ：礼スル心持」を見せている。杖を突いたりくつろいで火に当たる型などは、元来は特別の演出意図というよりも役者の実年齢からくる肉体的な制限と折り合う工夫と思われるが、そうした不利な条件を積極的に活かし、常とはひと味違う時頼像を描いてみせた「副王老人」のこの替演出は、習事として後に残されたようだ。能楽研究所蔵『福王流脇伝書別習秘伝書廿二ヶ条』に、「礼脇式」「江口脇止」「源氏供養別語」等とともに、「雪持之伝」の名で書き留められている型が、右とほとんど同じものである。いったん習事として成立した後は、進藤流の替演出とは逆に、時頼の深い感謝の念や高位の者らしい穏やかな優しさ等を感じさせる工夫として伝えられていったのだろう。なお、「雪持之伝」という名称は「笠にまばらに綿置く。杖つき、位静出。墨衣」という前ワキの出立から来たものと思われる。

（法政大学能楽研究所助教）